

引揚75周年

# 忘れてはいけな い記憶



引揚者を支援する仙崎の人たち  
(写真提供：ニュージーランド「アレキサンダー・タンブル図書館」)

昭和20（1945）年8月15日、昭和天皇の玉音放送で国民は戦争が終わったことを知りました。その日から人々の生活が大きく変わりました。

終戦前、日本は朝鮮半島、中国大陸や東南アジアに植民地を持っており、多くの日本人が日本国外へ新たな生活の場を求めて移住していました。終戦後、外地にいる日本人が国内へ帰国することになりました。日本人が国内に帰ってきたことを引揚と呼びます。終戦から今年で75年。多くの人を迎え入れ、送り出した引揚港としての歴史を持っている仙崎。

新たに寄贈された史料や証言をもとに当時の仙崎を振り返ります。

## 引揚港に指定された仙崎

昭和20年9月、博多や佐世保、舞鶴など国内十数カ所が「引揚港」に指定されました。山口県では当初、下関港が指定されましたが、関門海峡には沈没船や米軍が投下した機雷があるため、引揚船の航行が危険であると判断され、仙崎港が指定されることとなりました。

9月2日、第一便引揚者が、関釜連絡船「興安丸」で仙崎に帰ってきました。引揚船は、釜山港から日本人を乗せて仙崎港へ、折り返し朝鮮半島へ帰る人を乗せて釜山港へ運航されました。仙崎港では、昭和21年末までに、外地から約41万4千人の日本人が引揚げるとともに、約

34万人の朝鮮から来ていた人々が朝鮮半島に帰国しました。引揚者は進駐軍に財産を没収され、着の身着のまま帰国しました。仙崎や周辺地域では、寺や学校が救護所や宿泊所に充てられ、住民は総出で引揚者への救護活動にあたり、棧橋では青年団による弁当の配布、婦人会による炊き出し、宿の提供などが行われました。



▲朝鮮半島に帰る人々は省炭棧橋から旅立った  
(現在の道の駅センザキッチン付近)

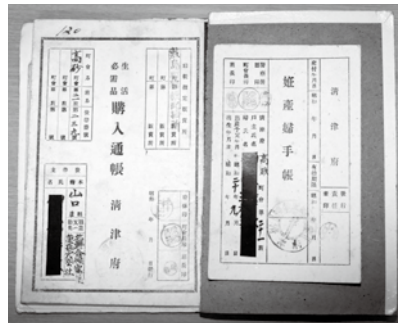
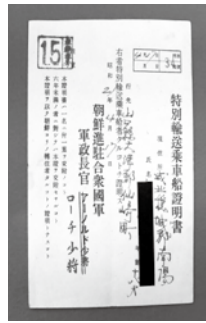
# 忘れてはいけない記憶

今年9月、仙崎の今津陽治さんと俵山出身で山陽小野田市在住の伊藤三枝子さんから、引揚当時の貴重な史料25点が市教育委員会に寄贈されました。

寄贈された史料は、引揚に関するものに加えて、終戦前の外地での日本人の生活を知ることが出来るものが含まれています。



▲満州で発行された国民手帳。氏名や職業、生年月日などが記載されている



▲日本行きの船に乗るための乗車船証明書

▲朝鮮半島で交付された生活必需品購入通帳と妊産婦手帳

死と隣り合わせの引揚の中で大切に持ち帰り、75年間保管されていたものです。

## 企画展「75年前の仙崎」 引揚って何？忘れてはいけない記憶〜開催中

■会期 11/15(日)まで

9:00～17:00

■会場 ながと歴史民俗資料室  
■問い合わせ 文化財保護室

TEL 23-1264

引揚者の手記を集めた『歴史の証言』海外引揚50周年記念手記集』を販売中です。



▲手記には心づくしの様子がつづられている

# 語り継がれる当時の仙崎

―仙崎婦人会は当時、引揚者に対し握り飯や味噌汁の炊き出し、お茶の接待を行いました。

敗戦直後の仙崎は、昼夜を問わず引揚のざわめきの中にあり、その様子は長く仙崎婦人会で語り継がれて来ました。現在の婦人会の皆さんに、お話を聞きました。

駐留していたニュージラード軍が三隅の平野にあつた兵舎から、毎日ジープで仙崎に来て、引揚げてくる人や朝鮮へ帰る人に対する業務をしていました。軍人がジープからお菓子を配つ

ていたのを子どもながらに覚えています。

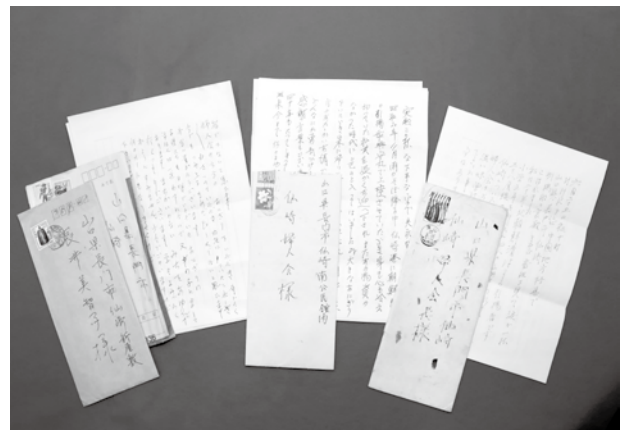
当時の婦人会の活動については、家族や中谷貞女さん(注)、婦人会の先輩から聞いています。(注)郷土文化なかと』11号、25号に中谷さんの手記を掲載)

仙崎が引揚港に指定されたからは、港には引揚者、地元の人、援護局の職員など人であふれかえっていたそうです。

炊き出しは当番制で、援護局へ行つて、引揚げて来た人にお茶や握り飯を出したりしていたということでした。

終戦前には仙崎に日本軍がいたので、その軍が貯蔵していた米をお寺の大きな釜で炊いてわかめむすびを作りました。米は十分な量がないので、雑穀などを混ぜて炊いていたと聞きました。自分たちは麦のおかゆを食べていたそうです。

それから、35年経ったころ、婦人会宛てに仙崎に引揚げた人から握り飯に対する礼状が届きました。そのことがテレビで放



▲仙崎婦人会あての3通の礼状

映されると、さらに2通の礼状が届き、安心感と勇気をもたらしたことへの感謝がつづられていました。

このたび、引揚から75年を迎え、当時の礼状を寄贈することになりました。より多くの人に75年前の仙崎で起こった事実を知ってもらいたいという思いと、後世へ語り継いでもらいたいという願いがあります。

先輩たちの活動が多くの人に喜んでもらえたことをうれしく思います。私たちは、これからも和と奉仕の精神を守り、引揚を語り継いでいきたいです。